江戸時代の花たち ⑧

書物に見る
江戸時代の園芸文化

小笠原 亮

「あさがほ叢」上下2冊 四時菴形影著。文化14年刊。左「鳳凰葉」、右「葵葉乱獅子」

「朝顔明鑑鈔」上中下3冊三村森軒著。享保8年序末刊。写本にて今日に伝えられる

「牽牛品類圖考」全一冊 峰岸正吉著。文化12年刊。左「孔雀台咲」、右「桜台咲」

「朝顔明鑑鈔」「牽牛品類圖考」

奈良時代に薬草として導入されたアサガオは、安土桃山時代まではそれ程鑑賞植物としての大きな地位を得た様子はなく、青色白色の花が枝折垣などに咲く姿が工芸品や絵画にその姿を止めているに過ぎない。

江戸時代に入り貞享、元禄以降の園芸ブーム到来によってアサガオも急速に鑑賞植物の一種としてクローズアップされ始めた。

我が国最古のアサガオ書は、尾張藩士三村森軒によって享保八年に著作された「朝顔明鑑鈔」がある。内容は、当時アサガオの栽培が盛んになったこと。花形花色、葉形に多くの変異があり、斑入り葉もあったこと。早咲きもあり、栽培の工夫によれば春咲き、冬咲きなども見られること。この頃から鉢づくりも盛んに行われるようになったことも書かれている。

さらに時代は七～八〇年下って、「化政の朝顔」との言葉が残るくらいの朝顔づくりの大ブームとなった。「花壇朝顔通」壺天堂主人著、乾坤二冊文化一二年五月刊、「牽牛品類圖考」峰岸正吉著全一冊文化一二年七月刊、「あさがほ叢」四時菴形影著上下二冊文化一四年刊など大阪、江戸に於いて図入木版多色刷によって出版された。内容的には「明鑑鈔」より時代も下っているのでさらに複雑な変化アサガオの出現があり、遺伝因子の組み合わせが行われた結果であろう。いずれにしてもメンデルの遺伝の法則こそ日本では発見できなかったが、それより一〇〇年以上も前に遺伝による変異を応用したアサガオ栽培を江戸時代の人々は楽しんでいた。さらにこの後弘化、嘉永年間にもう一度大ブームが来る。

1 写真提供／小笠原亮